

イギリスでの研究生生活

The University of Edinburgh

貝塚 剛志

(神戸大学)

2021年7月より、イギリスのエディンバラ大学において、神経科学の基礎研究に従事しております。元々所属していた研究室の先生が別の機関に異動することになったことをきっかけに、留学に挑戦することを決意しました。

私は海外への移住は初めてで、おまけに2021年前半はコロナウイルスの関係で渡航に関する情報が日々更新されていくという状況でしたので、渡航直前は準備を進めながら「果たして無事にイギリスの地を踏むことができるのか？」とハラハラしていました。幸い、受入研究室のPIであるSeth Grant博士をはじめ、秘書や日本人スタッフの方が様々な形で助けて下さったおかげで、何とかイギリスに入国することができました。

Sethはシナプスの網羅的解析の研究で著名な研究者で、お名前はかねてより存じていたのですが、実際にディスカッションをすると、非常に卓越したアイデアマンで、前向きなエネルギーに満ちた方だということがわかりました。自分も頑張らねばと日々感じています。これはPIやチームにもよるのでしょうが、これまで見た限りでは、研究への取り組み方や研究室の雰囲気は、日本とイギリスでだいぶ違いがあるように感じました。日本では個々人がひたすら実験して研究を進めていく傾向があるのに対し、イギリスでは複数名の研究者が互いの知識や技術を持ち寄って、チームワークで仕事を進めるという体制がとられることが多いように思いました。こうした体制を反映してか、ラボメンバーの人間関係が良好なものも特筆すべきだと思います。コロナウイルスで制限がかかっていた時を除けば、昼食は皆で集まって食べていますし、個々人の誕生日（カレンダーに記載してある）には皆でお祝いをするのが通例になっているようです。私も、元々そういうタイプではありませんでしたが、同僚の誕生日にはケーキを焼いて持っていくなどするようになりました。こうした文化も、心理的安全性を高め、チームとしての機能を高めているように思います。

私が直面した課題のひとつに、言語の問題があります。英語はどちらかと言えば得意だと思っていたのですが、いざ着任し、共同研究者とのディスカッションやラボメンバーとの会話を始めてみると、思っていたよりはるかに言葉が聞き取れなかったので冷汗を流しました。もちろん私のリスニング力の問題もありますが、どうやらイギリス、とくにスコットランドの英語は、一般に学校で習うアメリカ英語とは発音がかなり異なっているようです。研究を進めるにあたっては、行き違いが発生しないよう、なるべくメールで確認をとるようにしつつ、動画の視聴や日常会話などで英語力の向上に努めています。

最後に、今回私を受け入れて下さり、異動にあたって様々なご助力を賜りました研究室の皆様、そしてリサーチフェローシップに採択して頂きました上原記念生命科学財団の皆様には大変感謝しております。厚く御礼申し上げます。良い研究成果を残せるよう、今後とも頑張っております。



エディンバラ市街地